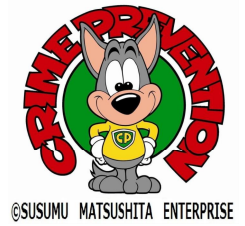


# スマホから学んだこと

岡山県立岡山操山中学校 2年 岡田 真子



私は、中学校の合格祝いにスマートフォンを買ってもらった。

「まだ持ってないん？よう生きとれるなあ。」

と小学校時代、同じクラスの女子に馬鹿にされてきた。

「真子はスマホ持っとらんから、うちらと繋がれんから。」

と、あからさまに仲間外れにされることもあった。

これで、やっとみんなと同じになれる。手のひらにある通信機器は世界中にあるどんな宝物よりも輝いて見えた。

スマホを使うにあたって、母はいくつかルールを定めた。

- ① 使用時間を守ること
- ② 知らない人とやり取りをしたり、個人情報を流したりしないこと
- ③ 課金をしないこと

そして、SNSをめぐる数々の事件を元に、スマホの危険性を説明した。

それを聞きながら、私は心の中で笑っていた。この人は、いつまで私を子ども扱いするのだろう、自分はスマホのおかげで万能なのに。知らない人の遠いところの事件なんて、他人事だった。

スマホの中はキラキラしていた。みんなSNSで楽しそうに交流している。みんなやっているのに、何故自分にだけ制限があるのかわからなかった。

親に黙って、SNSのアカウントをたくさん作った。これは学校用。こっちは推し活用。それは鍵アカだから、安全。知らない人でも、好きなアイドルが同じなら信用できるからどんどんフォローした。外国の人でも、翻訳機能を駆使してどんどん繋がった。誰よりも早く推しの情報を得ないと。もっとフォロワーを増やさないと。フォロワーが日に日に増えていく高揚感に酔い、常に焦ってスマホをいじっていた。

今思えば、当時の私は狂っていた。

「夜遅いから、今日のスマホはおしまいね。」

「知らない人に返事したら駄目よ。」

折りにつけ、母が声をかける。だが私は親の目を盗み、画面を覗かれないように壁に背をつけて操作を続けた。

「クラスの友達としかやってないよ。」

と嘘を吐き続けた。

情報にあふれ世界が広がったはずなのに、私の視野はどんどん狭くなっていった。キラキラした世界で、みんなに褒められたい。わあ、すごいねって、チ

ヤホヤされたい。なのに、誰も反応してくれない。あいつらばかり幸せになりやがって。悔しい。負けたくない。懂れていたものは、醜い嫉妬に変わっていった。

気がつけば、自分の写真を知らない人に送り、個人が特定されかねない情報も教えてしまっていた。母に言われたSNSの危険性の話は、頭から抜け落ちていた。正常な判断はできなくなっていた。

ある日、私の父に身に覚えのない料金の請求書が届いた。色々調べたり問い合わせたりして、私が無断で作っていたアカウントが有料のものであることが分かった。「登録」が無料なだけで、月会費はしっかり取られていたのだ。芋づる式に、SNSに送られていた卑猥な文言や「いつ会える？」といった身の危険を感じるようなやり取りも親にバレた。母は泣いていた。父は、ただ黙っていた。

新しいお友達と仲良くできるように、勉強や生活に役立つようにと無理してお金を工面してスマホを持たせてくれたのに、私は親の信頼を裏切ったのだ。

やっと私は、目が覚めた。

結局私は、スマホを解約した。半年ほどの使用期間だった。スマホはとても便利だが、それを正しく使いこなせるほどの力が自分にはなかった。スマホに心を支配されていた。振り返れば、恥ずかしい。もう少しで、取りかえしのつかない事件に巻きこまれていたかもしれない。私は、スマホやSNSの怖さを身を持って学ぶことができた。

今のクラスの友人は、スマホがない私を仲間外れにしない。家の電話や手紙など、工夫して連絡を取ってくれる。スマホがない分、家族との会話も増えた。ネットのニュースをうのみにするのではなく、新聞やテレビのニュースなども合わせて考えるようになった。

便利な中には、必ず危険が潜んでいる。これからは、周りに流されない強い心と立ち止まって考える冷静さを持って行動したい。

顔の见えない相手より、実際に目の前にいる人や、目に見えるものを大切に、丁寧に接したい。